

戀娘首父

九

森の毒殺

〔解題〕 安永四年九月廿五日から江戸の薩摩外記座初演。作者は松貫四・吉田角丸。江戸新材木町二丁目の村木商白子屋庄三郎の養子又四郎の妻お熊が手代忠八と姦通して又四郎を殺さうとしたが未遂に終つたのを、大岡越前守の裁斷の結果、享保十二年二月廿五日にお熊は鈴が森で死罪に處せられた事件を材題として脚色したもの。

家運の傾いた城木屋では、金のために一人娘のお駒に喜藏といふ掣を取らねばならぬ破目に陥つた。然るにお駒は髮結新三と戀仲であつたが、才三はもと侍で、家寶の茶入詮議のために身をやつして居るのである。而してその茶入が喜藏の手にあるを知つたので、結婚を利用してお駒にその取戻しを頼む。處が一方に於て兼てお駒に横戀慕の番頭丈八は、目的貫徹のために喜藏の毒殺を勧めたので、お駒は才三と添はうが爲に夫を毒殺す

る。そして萬事は鈴が森の段に於て解決するといふ筋。美しいお駒が刑場へ引かわる時、黄八丈を着て居たのに因んで外題名をつけたのである。曲輪の段、道行夢路の二つの雁、屋敷の段、祭の段、城木屋の段、評議の段、鈴が森の段より成り、その中城木屋の段と鈴が森の段とが名高い。

この時才三の人形は吉田冠三、お駒は吉田清五郎で、城木屋の段の「ソリヤ聞えませぬ」の條の豊竹筆太夫のクドキが大好評で、諸人が口眞似をして、お駒の淨りりは大流行であつた。「闇の夜にお駒とお駒行き當り」の川柳はこの情況をよんだのだといふ。

歌舞伎では靈安永五年三月三日から中村座で興行され、爾來江戸の歌舞伎に於ても大に行はれ、書替も出来、また豊後節の淨りりにも多くの作曲を見るに至つた。

三重へ急ぎ行く。地人の身の。フシ捨て所廻つて以上オ、四度見た。が扱て美しくも知れぬと。地噂とりん、口々に。とや名にふりし。鈴ヶ森の所刑場所。い娘ぢやわい。あれをころつとやるとあんまり待つて寒なつた。鮫洲の茶屋青竹にて矢來を構へ。邊りにきらめく言ふはあつたらのぢやないかいの。で一杯せう。サア／＼ござれと打連れ拔身の鍔。けばれの役人馳せ速ひ。科イヤ／＼。何ほ顔が美しうても心は鬼てオクリ皆々。かしこへフシ走り行く。地子を思ふ闇より闇に目も分ず。ク、キ人今やと待ちかけしは。この世からなぢや。丙午ぢやあるまいし。男を殺す只さへ暗き父親の。手を引く妻も諸共る地獄の責め忌はしくも亦。恐し。といふ事が。どこの國にかあるものぢに涙に見えぬ道筋を。現ともなく走る地哀れ見に寄る諸見物。あそこや爰にやない。オイ／＼。さう一途にとも。夢路を歩む。心地して漸う。かし立集り。調何とこの科人もモウ來さうはしやんな。女が男を殺すとは。モよこへ廻り著き。地見れば厳しき竹垣に。なものぢや。おれは牢屋を引出すと直く／＼堪忍のならぬ譯。ありや間男おぐに通り町へ駈抜け。それから河岸へつとどつこいしよ。ヤ間女房事であらさも恐しき拔身の鍔。あれで我が子を

は悔しい。未來は奈落へ落ちるとも。

娘が命助けてたべ。南無如來様。南

無如來殿。エ、如來め。サ、スう

いふがお腹が立たば。どうぞ娘が助か

るやう。お慈悲ぢや願ひ上げますと。

愚に返つたる親心。母は猶更正體な

く。才三殿が盜まれし茶入とやらが出

るならば。助かる筋もあらうかとそれ

ばつかりを樂しみに。今日よ翌日よと

待つ甲斐も情ない今日の今。死ぬる娘

が心の内思ひやつていぢらしい。病煩

ひで死んでさへ子を先立てし親の身

は。悲しうてならぬもの。脱塵蝶よ花

よと撫でし子を。科人にして殺すとは

モよく前世の因果かと。狂氣の如

く身を悶え。夫婦手に手を取りかはし。

絶え入り消え入る憂き涙餘所の。見る

目も。フシ哀れなり。折もさわ／＼諸

見物。そりや科人がもう爰へ。そりや

来るわと。フシ立騒ぐ。地跡を追ひ

下女男。調ヤア旦那様。お内儀様。

歎きはお道理さりながら。お怪我があ

つては猶大事。地マア／＼お出でと手

を引いて暫くへ片方に。フシ介抱す。

思ふ事。叶はねばこそ憂き事の。戀と

義理との諸手綱。二上不便やお胸は夫

の爲。かゝる憂き身のしはり繩。首にか

けたる水晶の。珠數の數さへ消えて行

く。説屠所の羊の歩みより。はかな

き身ぞと觀念し力なく。ナホスフシ

引かれ来る。地代官堤彌勝治お胸に向

ひ。同最前屋敷にて役人中より申し渡

されし如く。仔細ありとはいひながら。

假にも夫を殺したる科は遁れず。重き

刑にも行はるべきを。お上のお慈悲を

以て。死罪に仰付けらるゝ。有難く存

らるる劍の山。身を切り裂かれ憂き恥

目も。フシ顔を上げ。詞を。曝すも定まる因縁づく。約束ごと

見物。そりや科人がもう爰へ。そりや

何事も皆私が心でかゝる身の罪科。露と。諦めても。二世の契りの其の人と。

一世と限る二親の。もしや群衆ぐんしゆの其のた。逢ひたかつた逢ひたかつたわい二人ながら追付け未來で逢ふわいな中に。見えはせぬかと伸上り。伸び上りても竹垣の。隙間がくれの人群ひとぐみに目も泣き腫はれて見え分かぬ。心を思ひ諸逢ひたう思やる。ア、コレ／＼母様。見物濡れぬフシ袂はなかりけり。群衆もう言うて下さんすな。聞く程戀しい集押分け二親は。竹垣に取付き縋り。床しいお人の。お顔が目先にちら／＼と。片時かたとき暫時も放れぬわいな。放れぬ親子一世の暇乞ひちやもの。来て居いられな。私が斯ういふ心から。お年寄でよいものかいなう。来て居いでいられたお二人へ。こんな歎きをかけまものかいなう。コレ／＼喚。嗚や此のする。必ず／＼泣かずとも娘でも何で頃きざしのうき苦勞。娘が顔も。マ瘦せたでもない。アリヤ前生の敵かたきちや。憎いやあらう。どの様にして居る事ちや。エつ不孝者と。思切つてふつとりと。歎きを止めて下さんすが。年少せうしやうしは冥途めいども。おぼこ娘のあどなさ。思ひやり顔が一目見たいわい。おりや必すく／＼思うて。煩うて下さんすしやこな様の目の見えぬのが羨しい。なえ。ソレ／＼。其の様にしをらしいみすばらしい娘が形かたち。見てゐる母が此の胸は、裂けるわいのとどうと伏し前孝行な事いうてたもるもの。く／＼下部とも。時刻移ると引立つる。二人後。不覺に取亂す。父様。母様。よ思はいでかいなう。思はいでかいなう來て下さんした。わしや逢ひたかつた。何の跡に片時も生きて居られう。見物群衆は口々に宗旨しうし々々のフシ

手向草。地折もこそあれ才三郎。丈八命赦免もくけんの状。御披見ごひけんあれと差出せば。婦。夢に夢見し心地して、フシ悦び涙ぞに繩をかけ。群集押分け矢來の内。詞彌藤地治取つて押開き。詞成程々々。道理なり。地お駒が細目とく／＼と。御預けの茶入の盜賊喜藏に紛れなき紛れなき赦しの趣。親の敵とあるから解けて結びし戀娘。千代も變らぬ御恵由。この丈八が白狀故再び茶入も我手は喜藏丈八兩人は。才三郎の心任せおみ。重ね。重ねて黄八丈わうはちぢやう。昔語りを今に入る。又喜藏丈八兩人は此の才三郎。駒は直ぐに二親へ。御赦免なるぞとあ爰に。傳へ／＼し筆の跡世々に。そのが親の敵。お上へ委細申上げ。お駒がりければ。地はつとばかりに庄兵衛夫名をいちじるし。